

ユ、スリット、パフ、ヴェルジュガダンを挙げているのが通例のように思われる。では、その特徴はいつ頃から服装上に現われ、また、どのような美的意味を持っているのか、あるいは、非ルネサンス的要素はないのかを考察し、服装史におけるルネサンスの史的 position に再検討を加える。

2. ルネサンス絵画に表現されたものを検討すると共に服装史における図録を資料とし、そこに示された形式感情の掘下げ、ルネサンス精神との照合により美的様式的意義を探ろうとする。

3. ヴェルジュガダンを除き、16C様式の特徴とされるスラッシュ、スリット、パフの服飾的表現が既に15C後半に発生し、絵画の中に多数散見する。このような服装が人体自然との美的即一の立場から服装美のあらゆる可能態への意識的な展開に踏み出した点に注目し、15C服飾の美的意味を再検討の結果、それが次第に非ルネサンス的要素を加え、16Cにいたって、却って、非ルネサンス的なものへ転化して行こうとする傾向のあることを理解した。

B-34 ルネサンス服装の美的断面

塩塚 瑞枝

1. 人間性復興の精神がルネサンスという、一般的に、歴史的総合の基底をなしていると考えられている。しかし、服装史においてはなぜか一般史と異なり、16C様式を以てルネサンスを総括し、その特徴に、スラッシ